

QA25 基準値は、乳幼児や胎児への影響も考えて決められていますか

基準値は乳幼児を始め、全ての世代に配慮して決められています。

年齢や性別の違いによって、食品の摂取量や放射性物質の健康に与える影響は異なります。そこで、年齢や男女の別、妊婦など10区分に分け、各区分別に、仮に食品の50%※がその濃度レベルの放射性物質を含んでいて、それを食べ続けても追加的に受ける年間の放射線量が年間約0.9ミリシーベルトを超えない値（食品中の放射性物質濃度の限度値）を割り出すと以下の表のようになります。

※：我が国の食料自給率などを考慮し、流通する食品の50%（国産品の全て）が放射性物質を含む場合を仮定しています。

■年齢区分別の摂取量と放射性物質の健康に与える影響を考慮し限度値を算出

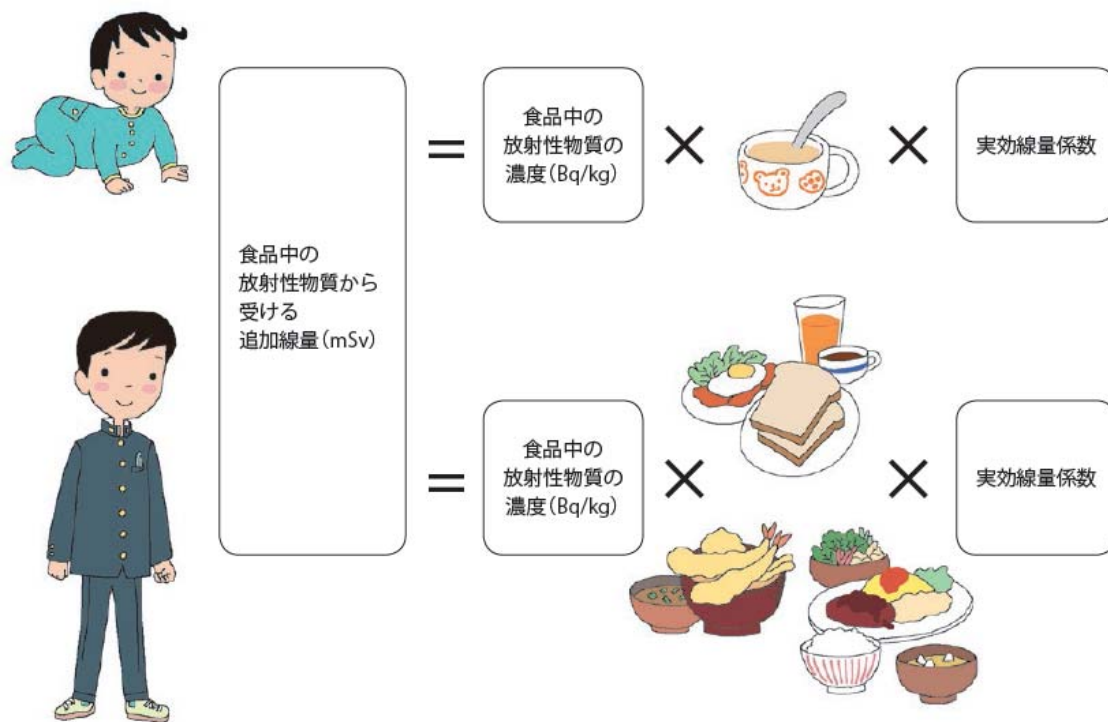
年齢区分	摂取量	限度値(Bq/kg)
1歳未満	男女平均	460
1歳～6歳	男	310
	女	320
7歳～12歳	男	190
	女	210
13歳～18歳	男	120
	女	150
19歳以上	男	130
	女	160
妊婦	女	160



基準値
100Bq/kg

年齢性別区分別の限度値は、13歳～18歳の男性の限度値120ベクレル/kgが最も厳しい値になります。これを踏まえ一般食品の基準値を「100ベクレル/kg」とすると、全ての世代、性別に対して考慮された基準値となります。

年齢が小さくなるほど限度値が大きくなる傾向があるのは、年齢区分ごとの線量係数の差よりも、食品摂取量の差の方が限度値の計算に大きく寄与しているためです。



乳幼児は少量の食事量全体で 0.9 ミリシーベルト以下、男子中高生は多量の食事量全体で 0.9 ミリシーベルト以下とする必要があるため、食品 1kg 当たりの限度値を小さくしておく必要があります。

さらに、1 歳未満の乳児が食べることを目的に販売される「乳児用食品」と子どもの摂取量が多い「牛乳」については、食品安全委員会が行った食品健康影響評価において、「小児への配慮」が求められていることと、これらの 2 区分は、流通品のほとんどが国産であるという実態から、一般食品の基準値の 2 倍厳しい 50 ベクレル/kg としています。

出典：消費者庁「食品と放射能 Q&A」（第 9 版）より作成

出典の公開日：2014 年 11 月 13 日

本資料への収録日：2015 年 3 月 31 日